

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720301

研究課題名（和文） アルメニアの完新世初頭における先史文化の考古学研究

研究課題名（英文） Archaeological study on the prehistory of the early Holocene in Armenia

研究代表者

有村 誠（ARIMURA MAKOTO）

金沢大学・国際文化資源学研究センター・客員准教授

研究者番号：90450212

研究成果の概要（和文）：南コーカサスにおける完新世初頭の遺跡の動態については不明な点が多い。本研究では、完新世初頭から中頃（前 10000～5000 年）までを対象に、アルメニアにおける先史文化の解明に取り組んだ。アルメニア北東部のイジェヴァンを中心として調査を行った結果、完新世前半の洞窟・岩陰遺跡が数多く存在していることが明らかとなった。また、それらの物質文化はアララト盆地の農耕村落遺跡群のそれと大きく異なることから、文化伝統の異なる集団が残した遺跡であることが推測された。完新世初頭のアルメニアには、生業、文化系統を異にする複数の集団が併存していた可能性が高い。

研究成果の概要（英文）：Large part of the dynamics of archaeological sites in the early Holocene in the southern Caucasus still remains unknown. This research project tried to investigate the prehistoric culture in Armenia during the early Holocene (ca. 10,000–5,000 BC). The results mainly concentrated on Ijevan region, northeast Armenia, have shown that there were lots of cave/rockshelter sites in this region belonging to the early Holocene. Material culture of these sites is quite different from that of farming communities in the Ararat plain. Therefore, we infer that several groups with different subsistence economy or cultural root coexisted in the early Holocene in Armenia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：西アジア考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：コーカサス、アルメニア、新石器化、完新世

## 1. 研究開始当初の背景

南コーカサスは、農耕文化の拡散という人類史における重要なイベントを研究する上で興味深い地域である。それは、この地が西アジアの北端に位置し、西アジアで生まれた農耕文化が拡散する際の第一接触地帯であ

ったと考えられるからである。

現在のところ、アルメニア（南コーカサスの一国）における最古の農耕文化（新石器文化）は、紀元前 6000 年頃に出現するシュラベリ・シヨムテペ文化とされる。従来、この

文化は、出現当初から栽培植物と家畜を備えていることから、外来の農耕民によってもたらされたと解釈されてきた。しかし、そのルーツについて確かなことは分かっていない。一方、これまでに私たちの研究によって、シュラベリ・ショムテペ文化とは文化系統の異なる完新世前半の遺跡（カムロ遺跡、ザフカホビット遺跡）が、アルメニア北西部のアラガツ山麓で確認された（表1）。これらの遺跡は、狩猟具が豊富な半面、農耕牧畜の証拠が希薄なことから、狩猟民が残した遺跡と考えられる。旧石器時代の伝統を受け継いだ中石器的な遺跡といえる。つまり、アルメニアでは完新世以降も農耕文化とは別に、狩猟民の文化が存在する可能性が指摘されたのである。

このような最近の研究成果を踏まえ、今後アルメニアの完新世初頭を研究する上で重要な2つの課題をあげたい。第一は、発掘調査された当該時期の遺跡数の少なさである。シュラベリ・ショムテペ文化の遺跡以外に、完新世初頭の遺跡は、私たちが調査した2遺跡だけである（表1）。完新世前半、およそ5000年間の先史文化の実態を明らかにするには、より多くの遺跡の発掘調査が必要である。第二に、南コーカサスにおいて農耕が定着する過程で、在地の中石器的な集団が果たした役割に関する問題である。前述のように、最古の農耕文化は、文化系統が不明な農耕民によってもたらされたと考えられているが、在地の中石器的な集団が農耕を採用（新石器化）した可能性も検討していく必要がある。

表1 アルメニアにおける完新世初頭の遺跡

年代	中石器的な文化	新石器的な文化
4500 BC	ザフカホビット	
	?	↑
6000 BC		シュラベリ・ ショムテペ文化
8000 BC	カムロ上層	? ?
10000 BC	? カムロ下層	

## 2. 研究の目的

上記の問題点を踏まえて、本研究は、アルメニアの完新世の遺跡動態を解明することを目的とする。本研究で明らかにする点は、以下の通りである。1) 完新世初頭の遺跡の動態を理解するために、考古学的踏査を実施し、遺跡の分布を把握すること。2) 同時期中石器集団（狩猟民）と新石器集団（農耕

民）の双方の遺跡を対象とし、出土遺物の分析によって、両集団間のモノの交換や情報の共有・交換、または隔絶、といった点について調べ、生業の異なる集団間の関係の実態について迫る。

## 3. 研究の方法

本研究で実施する研究方法は、遺跡の分布調査、発掘調査、そして遺物の総合的な分析の3つである。分布調査では、衛星写真とGPSを用いながらアルメニア人考古学者と共同で踏査を実施する。次に踏査で発見された遺跡の中から、安定した包含層をもつと思われる遺跡を選び、発掘調査を行う。発掘調査後には、遺物の分析をそれぞれの専門家の協力を得ながら実施し、出土遺物の総合的な分析を行う。

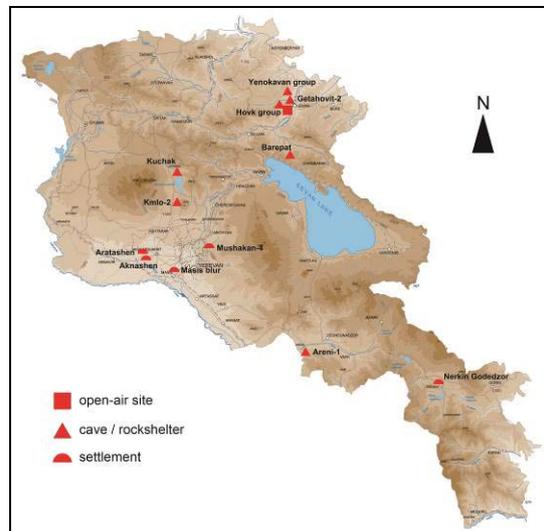


図1 アルメニアにおける完新世初頭～中頃の遺跡

## 4. 研究成果

### (1) 先史遺跡の分布

北部のギュムリ周辺と北東部のイジェヴァン周辺において遺跡の分布調査を実施した。ギュムリ周辺では、黒曜石や石英安山岩の露頭において、旧石器時代の石器を発見した。しかし本研究で目的とする完新世初頭の遺跡を発見することはできなかった。一方、イジェヴァン周辺では、完新世初頭に位置づけられる遺跡を複数発見することができた。同地域には、アゼルバイジャンへのクラ盆地へと続くアグステフ川が流れる。アグステフ川流域は、小コーカサス山脈（アルメニア）とクラ盆地（アゼルバイジャン）をつなぐルートとして、古来利用されてきたことが知られており、先史時代においても重要な移動経路であったことが推測される。

本研究の2年目以降、アグステフ川流域の

複数の遺跡において、発掘調査を実施することとなった(図1)。

### (2) 先史遺跡の発掘調査

アグステフ川流域で新たに発見した遺跡、バレパト、ゲタホヴィット、ホヴク、イエノカヴァンにおいて発掘調査を行った。いずれも洞窟または岩陰遺跡である。イエノカヴァン以外の遺跡では、石器、土器、獣骨などが出土する紀元前5千年紀(後期銅石器時代)の文化層が確認された。イエノカヴァンでは、鉄器時代/青銅器時代層の下層において先土器層を確認した。その石器組成は以前に調査を行ったカムロ遺跡出土のものに近く、完新世初頭の遺跡の可能性が高い。同遺跡の資料について、今後、放射性炭素年代の測定が必要である。

本研究で調査を行った遺跡のほとんどは標高1000-2000mの森林地帯に位置する(図2)。立地や遺跡規模、遺構の状況から考えて、これらの遺跡は森林帯の動植物資源を利用するための一時的なキャンプサイトであったと思われる。

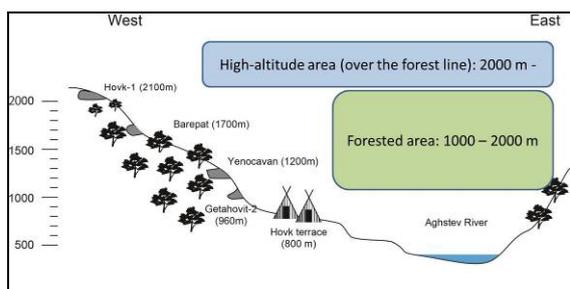


図2 アグステフ川流域の遺跡群の位置

### (3) まとめ

アルメニア北東部の山岳地帯において、完新世初頭～中頃(後期銅石器時代)の遺跡群を確認した。その物質文化は、アララト盆地に位置するシュラベリ・ショムテペ文化の遺跡群(新石器時代～銅石器時代)の物質文化と大きく異なる。その理由の一つとして、遺跡の機能が異なることが考えられる。シュラベリ・ショムテペ文化の遺跡は、低地に位置する集落遺跡である。それに対して、山岳部で発見された遺跡の多くは、洞窟や岩陰を利用した短期に居住された遺跡である。こうした遺跡の機能差が、物質文化の差につながった可能性は高い。

しかし、両遺跡群の間では、石器の型式や土器の様式に至るまであらゆる物質文化のスタイルが大きく異なることは見逃せない。遺跡群間の機能差よりも、むしろ、アララト盆地と山岳部では物質文化を残した集団がそもそも異なっていた可能性が高いと考える。興味深いことに、アララト盆地の遺跡群と山岳部の遺跡群とでは、使用する黒曜石の

産地が異なる。両集団が活動する領域が異なっていた可能性が高く、両集団がすみ分けを行っていたことが考えられる。

近年の他の調査隊の研究成果も参照すると、アルメニアの完新世初頭～中頃にかけては、地域によって異なる物質文化が存在していたと考えられる。このことから、アルメニアにおける新石器化の開始やその受容過程が単一ではなく、かなり複雑な様相を呈していたことが推測される。それは、低地、山岳部、山間盆地といった大きく異なる自然環境が、狭い範囲で連なるというアルメニア独特の自然環境が深く関連していると思われる。分析途中の動植物遺存体などの遺物の分析によって、遺跡ごとの生業に関する詳細なデータが得られれば、今後さらにアルメニアにおける先史時代の実像に迫ることができるとと思われる。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① Arimura, M., Badalyan, R., Gasparian, B., Chataigner, C. "Current Neolithic Research in Armenia", 査読なし, *Neo-Lithics* 1/10, 2010, pp. 77-85

[学会発表] (計2件)

- ① Arimura, M., "Points with the Palmyran Retouch from Tell Ain el-Kerkh, Syria" 7th International Conference on the Chipped and Ground Stone Industries of the Pre-Pottery Neolithic, 2012.2.15, Auditori Pati Manning. Centre d'Estudis i Recursos Culturals (スペイン)
- ② Arimura, M., "Prehistoric sites in Northwestern Armenia", 7th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, 2010.4.6, UCL (イギリス)

[図書] (計3件)

- ① 藤井純夫、有村誠、『多民族国家の多民族的文化遺産学』金沢大学文化資源学研究第11号、金沢大学国際文化資源学センター、2013、全67頁
- ② 有村誠「初期農耕誕生へのプロセス」『イエローベルトの環境史』佐藤洋一郎・谷口真人編、弘文堂、2013、pp. 130-152
- ③ Arimura, M., Gasparian, B. and Chataigner, C. "Prehistoric sites in Northwest Armenia: Kmlo-2 and Tsaghkahovit", In Matthews, R. and Curtis J. (eds.), *Proceedings of the 7th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East Volume 3*,

Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2012, pp.  
135-149

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有村 誠 (ARIMURA MAKOTO)  
金沢大学・国際文化資源学研究センター・  
客員准教授  
研究者番号：90450212

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし